

平成18年10月

淀川水系流域委員会 様

淀川大堰開門の設置によって生ずる塩水遡上と水質の汚染、環境問題について

1. 上流への塩水遡上の必然性について

淀川には数多くの上水の取水口があり、特に新開門の計画されて居ります淀川大堰上流には下流より

- ① 阪神上水公団取水口(神戸市東灘区、芦屋市、西宮市、堺市、高石市、泉大津市、泉北郡、岸和田市、貝塚市、泉佐野市、泉南市、泉南郡等)約数百万人の上水を供給します取水源
- ② 大阪市工業用水取水口
- ③ 大阪市水道局取水口(大阪市数百万人の上水源)
- ④ 尼崎市水道局取水口(尼崎市民の上水源)
- ⑤ 吹田市水道局取水口(吹田市民の上水源)

上記5ヵ所の取水口が大堰より上流1.5km迄に集中して設置されて居ります。従いまして開門の開閉による塩水の遡上は必ず起こります。

淀川大堰の場合水資源公団による建設であり塩水の遡上防止が第一の目的であります。

昭和38年長柄橋橋脚下の可動堰を嵩上げ工事しましたがこれも塩水の遡上を防ぎ500m上流で阪神上水道公団の取水口を設け取水を行う為でありました。現在の堰の上下の落差は満潮時0.3m~1.1mであり、開門の水深は3mであり上流部にもかなりの塩水が、遡上するものと思われる。

違う角度よりの判断ですが、ある多数の釣り人の証言によりますれば、神崎川の吹田橋上流(神崎川河口より16km上流)でボラを多数見かけ、又スズキを釣った人が多数おられるそうです。ご承知の通りボラ、スズキは汽水域に生息する魚で塩分が割合に含まれている水域に生息可能な魚類です。小生は一度大堰下流の水を沸騰させ塩分の含有を調べた事がありますが、かなりの塩分濃度を持って居ります。今現在淀川大堰を境にして上は淡水魚(コイ、フナ、ナマズ等)下は海水魚(イワシ、ボラ、スズキ、チヌ等)とほぼ住み分けられて居ります。尚淀川大堰下流付近はハネ、セイゴ、釣りのメッカになって居ります。従いまして塩分濃度はかなりあると判断されます。

開門の設置によるこれらの魚の遡上及び塩分の遡上は必然的に起こってくる結果であります。

2. データよりの塩水遡上の必然性

水位比較

大堰上流水位(10.0km 地点)OP2.5~3.3m

大堰下流水位(9.6km 地点)朔望平均干潮水位OP+0.6m

大堰下流水位(9.6km 地点)朔望平均満潮水位OP+2.2m

このデータを見れば誰でも気がつく事ですが、上流の低水位OP2.5mの時1日2回の満潮の時は下流はOP+2.2mであり水位差は0.3m(30cm)となります。わずか30cmの水位差にて水深3mの開門を1日数十回開閉するとして塩水の

遡上が起こらないと言う方々を疑います。

上流取水口の大堰よりの距離

阪神上水道公団、大阪市工業用水取水口	250m
大阪市水道局取水口	800m
尼崎市水道局取水口	1350m
吹田市水道局取水口	1450m

又塩水の遡上は 250m 上流の阪神上水取水口部分だけでなくかなりな上流部迄及ぶ事は明らかです。

前述の神崎川のボラ、スズキの生息域ですが淀川 13km 地点にスライドした地域に迄及んで居ります。

3. 地球温暖化による海水面の上昇による影響

識者をご存知の海水面の上昇ですが 100 年後に 1 m の予測は余りに有名です。しかし前記予測ですがより急激に温暖化が進行している現状を直視すべきです。30cm の水位差は 30 年後に 0cm の同水位となります。その後は上記の時点の水位差は塩水面の方が淡水面を上回って行きます。今舟運復活の夢物語を捨て近畿 1000 万人の飲料水を死守するよう委員の方々の良識の喚起を期待する次第であります。

付記

閘門の水も常に安定した状態とは限りません。小規模の高潮、津波等にも塩水部水位の上昇は起こってきますので危険は更に増大します。

福本和夫